



原色版印刷とともに半世紀の歩み

『大正初期の製版』

史談会開催日

昭和 45 年 (1970 年) 12 月 8 日

当時学校で習ったこと

当時（大正初期）、学校（東京高工応用化学写真製版科）でどんなことを習ったか、製版はどんなものを使ったかをまずお話しします。

グラビア、色の石版、3色版、コロタイプ亜鉛凸版、網目版などです。

グラビアからお話ししますと、その当時、白線スクリーンなどはありませんから、散粉箱という、アスファルトの粉を細長い箱のところへ埃りをたてるようにしておいたものに、そこへよく研いだ銅版を置き、それに上にあがった粉が徐々に落ちてきて砂目のような点が付くわけです。それを火であぶると、インキのポジ点ができるわけです。スクリーンを何も使わずに、アスファルトの粉末が落ちてきたものがくっ付き、それが写真のカーボンチッシュを通して版ができたようなわけです。

その時に、ダニエルの写真をやったと思うのですが、刷る機械は手で回すやつで、合版ですからローラーでつめて、手で余分なインキを取って刷ったわけです。ですから、人によって同じ版でもそれぞれの人の個性があるので「この版は芸術的だ」と先生がおっしゃったことを覚えています。

コロタイプは、その時分なかなか盛んでして、すりガラスの上にゼラチンをひきまして、それに真空管で感光性を与え、そこへ写真を焼付ける。写真を焼き付けた部分は膠が硬化してふくらまない。焼き付かない部分は水を吸収してふくれまして、光に当たった程度によって凸凹ができ、一種の凸版ですから、それをインキローラーでインキを塗り1枚1枚刷ったように思います。手島校長の写真をやったような気がします。

亜鉛凸版はアスファルト法で、アスファルトを塗って、

■ 語る人

若林 孟夫 氏
(中村製版所社長)

■ 【若林孟夫氏略歴】・

明治 24 年 1 月 13 日生。大正 7 年東京高工応用化学写真製版科卒、日本美術技師長、凸版印刷株式会社写真製版部長を歴任、昭和 8 年若林原色写真工芸社を創業。昭和 20 年戦災で工場焼失、一時凸版印刷株式会社技術部嘱託、昭和 28 年株式会社若林原色写真工芸社を設立、取締役社長に就任。昭和 36 年東京都写真製版工業組合、東京写真製版工業協同組合理事長に選出される。

アスファルト自身が感光性を持っているが、弱いので5分や6分焼いてもだめで、その時分、20分、30分焼くことは平気だったのですが……、今はダウエッチでやっておりますが、その時分は線を守るために、キリン血ではなくアスファルトの粉末をかけて、四方盛りというようなものをやってそして腐蝕したように思っています。

写真版は、学校でやったのはコロジオンをひいてやったのですが、まず始めにガラスを磨かされまして、そのガラスを磨くのに「大字形の連続で磨け」と難しいことを言う、つまり「大」の字を書くようにして……。ガラス磨きの台があり、そこへキャビネですがガラスを置いて、磨いてコロジオンをひいて浸銀するわけですが、約5分くらいつけるわけです。その時、時間を計るのに砂時計を学校は使っておりました。今思いましても、珍しいと思います。

そして、浸銀の時間を砂時計で計って写真を撮したわけですが、まだアークが来ないうちのこと、南向きのすりガラスの屋根であり、夏は暑くてたまらなかった。そういうような所で撮しておりました。

それから、アークがいよいよ入った時には今と違い丸い輪みたいなのがあって、カタカタしては消えてしまい、そのたびに吹いてみたり、物差しでついでみたりしたものです。今申し上げてきたように、コロタイプにしる、亜鉛凸版にしる写真版にしる、ごく初期の揺籃時代みたいなものでした。まだ石版に色を手で描いて、色を出すような時代でした。学校でもそのような設備をするのは金がかかるから、理論だけだったわけです。

そして、当時乾板は、今のような分解する時のパンクロ乾板は全然なく、色に感ずるものはオーソクマチックというものがありました。それは、僅かに緑に感ずるようなところがあって赤とか、グリーンの濃いのかは全然感じませんから、それも感じるようにしなければいけないので、パンクロがないものですから、自分でイルフォードの赤札という普通乾板をピナクロムという感色剤の溶液の中へつけて、それを乾かしてパンクロを自分で作ったわけです。

ですから、明日分解しようとする場合はピナクロムの薄い液の中にちょうど現像するように平皿の中で約3～5分間、真暗な中でそれを浸み込ませて、そして乾燥箱の中へ



入れておき、明るくなる日になると乾いているので、それでもって写すわけです。非常に具合のいいパンクロでした。後になって出来たパンクロよりも、自分たちの作ったほうが良かったと思っています。

このパンクロは、ちょうど第一次欧州戦争のために、パンクロの元を作るピナクロムという薬がなくなってしまったで大騒ぎをしたことがあります。で、その当時、色を濾すタンクフィルターといって、液体を平たいガラスの器に入れて、それをレンズの前あるいは後に置いて撮ったものです。

ですから、出張して撮すとなると、赤の液体、緑の液体、紫の液体を用意しておいて、フィルターも自分で赤を撮ったらそれを瓶にあけゆすいで緑を入れ、同じようにしてまた紫を入れる。非常にややっこしいものでしたが、それを湿式フィルターと言いました。乾式になるまでそれを使っておりました。

しかし、その時は色の誤差というかフィルターの誤差が時に伸ばしたりすると出てくるんです。その誤差が、一つのフィルターですから、中の液体を入れ替えたりするものですからちっとも狂わないのですが、非常に面倒なものでした。それで、ぞんざいに扱うと前の液の色が残っていて変なふうになったりするんです。

それを2、3年くらいやりました。

